竹内　実著

愛のうた

中華愛誦詩選

中公新書

974

中公新書 974

竹内 実著

愛のうた

中華愛誦詩選

中央公論社刊

竹内 実（たけうち・みのる）

1923年（大正12年），中国山東省に生まれる．
1949年，京都大学文学部（中国文学専攻）
卒業．現在，立命館大学国際関係学部教授．
京都大学名誉教授．中国文学，現代中国論
専攻．

著書『中国の思想』（NHKブックス）
『現代中国の展開』（NHKブックス）
『友好は易く理解は難し』（サイマル出版会）
『中国文学最新事情』（共編，サイマル出版会）
『毛沢東と中国共産党』（中公新書）
『魯迅遠景』（田畑書店）
『魯迅周辺』（田畑書店）
『中国生活誌——黄土高原の衣食住』（共著，大修館書店）
『中国喫茶詩話』（淡交社）
『中国随想　一衣帯水』（蒼蒼社）
『中国を読むキーワード』（蒼蒼社）
『毛沢東』（岩波新書）

愛のうた
中公新書 *974*
© 1990年
検印廃止

1990年6月15日印刷
1990年6月25日発行

著　者　竹内　実
発行者　嶋中鵬二

本文印刷　三晃印刷
カバー印刷　大熊整美堂
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋 2-8-7
振替東京 2—34

Printed in Japan
ISBN4-12-100974-6

まえがき

愛のうた。

人間のもつさまざまな精神と感情から、ひとつを切りとって、愛をうたった詩を集めた。

恋愛といい、愛情といっても、はたして同じであろうか。両者のあいだに微妙なちがいがあるようにおもう。恋愛の感情は不安定な危険にさらされている。夫婦間、家族どうしの愛情は安定した雰囲気である。漢字の表現で、よく「恩愛」というのは、長期に継続し、せっかちな見かえりを期待しない愛が、夫婦、家族の愛である、とうけとられているからであろう。

夫婦の愛情は家族、子どもへと拡がり、故郷にも及び、友人をつつむ。友情も、愛である。

愛に応えてもらうことができず、裏切られ、失望し、正反対の憎悪に転化するのも、心理の奥に望む愛があるからであろう。

この世、人間(じんかん)に、愛があると断言してよいものかどうか。しかし、失われたとき、ひとは、愛の渇きをおぼえ、あるはずの愛を求める。

ここに集めた詩が、はたして読者の期待する愛をうたっているかどうか。とはいえ、愛のさまざまなかたちは、みられよう。

＊

漢字をならべた詩は、一種、独特である。

漢字は一字一字がひとつの概念をもっている。概念は固く、まるで煉瓦のようである。煉瓦が内部をみせないように、一個の漢字も外界にたいして閉鎖されていて、したがって内部はひとつの世界である。

概念とは意味のことであるから、字形が意味に直結している。

意味をひきずった字形が、つぎつぎに出現し、あるところで区切られると、韻律がわきあがって詩になる。

一個、また一個と、煉瓦をつみあげた、万里の長城は、つまり漢字のつながりである。

山脈のうねりをなぞって山巓をのぼりつめ、そこでむこうの谷間へと姿を消す、長城。韻律をひびかせて終り、終ったあとも韻律がたゆたう、漢字の詩。

長城も、漢字も、中華世界の産物である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

＊

この本ではいきなり詩の世界に、はいる。
題や作者の名は、詩のあとへもっていった。
訳には、しなやかな、平がなの援助を借りた。
漢字ばかりの文章を読み解くのに、訓読（くんどく）という方法がある。さらに、そのあとに口語でくだいた説明的な訳をつける。訓読も説明訳もとばして、現代語におきかえる方法もある。
この本では、漢字をなるべく残し、漢字のわきに平がなの訓（よ）みをつけた。漢字の堅固な自己主張を、しなやかな平がなのルビがときほぐし、相互に響きあうのを期待したのである。文語的な調子はこれまでの訓読の読（よ）みにつながる側面もあろう。
訳の漢字は、常用漢字におきかえた。
◈を付して、鑑賞、あるいは語釈を付した。しかし、詩の訳によって、おのずから詩の世界にはいるであろうことを期待し、できるかぎり短くし、ときには省いた。
先人の名訳をかかげることも、試みた。
本ぜんたいを四章に分けた。あらましの時代区分である。
詩のまえに、詩のなかの一句をかかげた。それぞれの詩の見出しである。名句、佳句というべ

き句をひきだしたつもりであるが、一篇の詩の句が、ことごとく名句であり、佳句であろう。詩と詩を区切る、実用もかんがえてのことである。

＊

この一冊の、それぞれの詩は簡明素樸であったり、婉転朦朧であったり、激越尖鋭かとおもえば温柔慈愛である。時代のちがい、地域のちがい、作者の生活のちがいもある。ちがいが意識されるかもしれず、ちがいをこえて訴えてくる共通のものがあるかもしれない。

時間があいたとき空をみる。樹をみる。花をみる。眼を遊ばせる一刻（ひとときは充実の空白である。ぱらぱらと本をめくる。この一冊が手もとにあってほしい。

愛といわず、志（こころざし）について、閑適（かんてき）について、花鳥風月について、怪奇について、中華世界の詩はまだまだおおい。愛についても網羅してはいない。宝庫が、中華世界にはある。

竹内　実

愛のうた　目次

――名句・佳句による

まえがき

I　素樸と頽廃 ——古代 1

婚媾とよ　5
枯楊に華　生じ　8
女　筐もて　承く　9
窈窕たる淑女は　君子の好逑　11
灼灼　その華　16
我を求むる　庶士　18
日の夕　羊　牛　下り来る　21
一日　見わざれば　24
あに　あえて　愛まんや　26
我をして　息　る能わざらしむるなり　31
子　我を恵　思わば　35
子と夢を同じくして　甘みたけれど　37
君　我を思えども　閒を得ざるなり　39
虞や　虞や　若を　奈何せん　45
四方　楚歌の声　47
一　二　三　四　49
三、四月　とは　説是が　51
「新　人は　故　に　如ばず」　53
空　牀　独　守るは難し　56
夢に見れば　わが傍に在るも　58
本は　これ　同じ根より　生ず　62
草は　水と色を同じゅうす　64
後　来　新婦も　今は　婆となりぬ　66
聞く　君に　他心　ありと　69

天と地　合するとも　72
香汗　浸すは　紅の紗　74

II　悲痛と歓楽　——中世（一）　81

独　異郷にありて異客たり　85
西のかた　陽関を出ずれば　故人無からん　87
愁殺す　楼蘭　征戍児　89
枕上　片時　春の夢の中　92
一片の　氷心　玉壺に在り　94
花　東に流れて息まず　96
両は小くして　嫌猜こと無かりき　98
君の家　阿那辺　104
明月　帰らず　碧の海に沈み　106
故人　西にて辞す　黄鶴楼　108
斉の歌　空に情を復つ　110
昔は　杯中物好みしが　112
忽ち聞ゆ　岸の上なる踏歌の声　114
疑うらくは　これ　地上の霜なるか　116
瞑色　高き楼に入り　117
秦娥　夢　断たる　秦楼の月　119
紗を浣うは　何処の人ぞ　122
白や　詩　無敵　124
閨中　独　看つつあるか　127
国　破れて　山河　在り　129
生還　偶然に　遂げたり　131
家に還るも　歓趣　少し　133
珠簾　夕　漏　賒し　76
願わくは　郎の　馬の鞭と作らん　79

歌罷り　天を仰いで歎けば　135
良人早く歿り　諸孤は痴　138

Ⅲ　艶麗と繊細　——中世(二)　143

首を翹すも　佳期空しく　暗然　146
消瘦　さながら　河上の柳のごとし　148
一と集りたし　佳人の白玉の釵に　149
此夜　相思れしが　夢んとして成らず　150
倩郎よ　早く　覓めよ　買花船　152
綰び　同心結と作さん　154
匡牀に　愁いて臥り　斜曛に対す　157
夢中　恍惚として覚ゆ　来初を　158
ただまさに　分付せん　春天の月　160
君が遠く別るるを思えば　妾の心愁う　163
「憂を忘れよ」というも　総に対う「あに憂を忘れんや」　165
稚子は　針を敲いて　釣鈎を作る　140
也　風に随いて去き　郎と同にありたき　167
来生　何をか願う所ぞ　168
書き来る　字字　苦からん　170
まず　儂の袖裡に懐め　171
花　開き　折るに堪えなば　172
涙　墨に灑ぎ　書を為く　175
書客　昌谷を夢む　177
君が纏綿たる意に感じ　179
一夜に　一心死す　182
画眉の深浅　入時や無や　183

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

還しも勝る　独睡時に　185
我は　これ　曲江　臨池柳　188
梨花一枝　春　雨に帯るる　189
深宮に　二十年　210
狂風　落ち尽す　深き紅の色　212
荳蔻　梢頭　二月の初　214
多情は　かえって似るよ　総　無情　216
楚腰　纖細　掌中に軽し　217
二十四橋　明月の夜　219
両に行ぶ紅粉　一時　回る　221
春の窓　一覚　風流の夢　223
春蚕　死に到り　糸　ようやく尽き　225
人間　燭　焔　銷ゆ　227
鶯よ　啼きて　もし　涙あらば　229
何か共に剪るべし　西窓の燭　231
常娥　まさに悔いてあらん　霊薬を偸めるを　233
心に　霊犀の　一点　通じるあり　234
偸み看たり　呉王　内苑の　花　236
人生　足　るるは　別離　238
たとえ無情に棄てらるるとも　241
笑いつ　檀郎に向い　唾　す　243
流水　落花　春は去りゆく　246

Ⅳ　日常のなかの物語　——近世以後　249

憔悴す　鑑中の　鬼　252
もと　期いしは　百歳恩　255
呼ぶに慣れしに　なお　口を誤るは　257
ともあれ　独　婦と飲まん　259

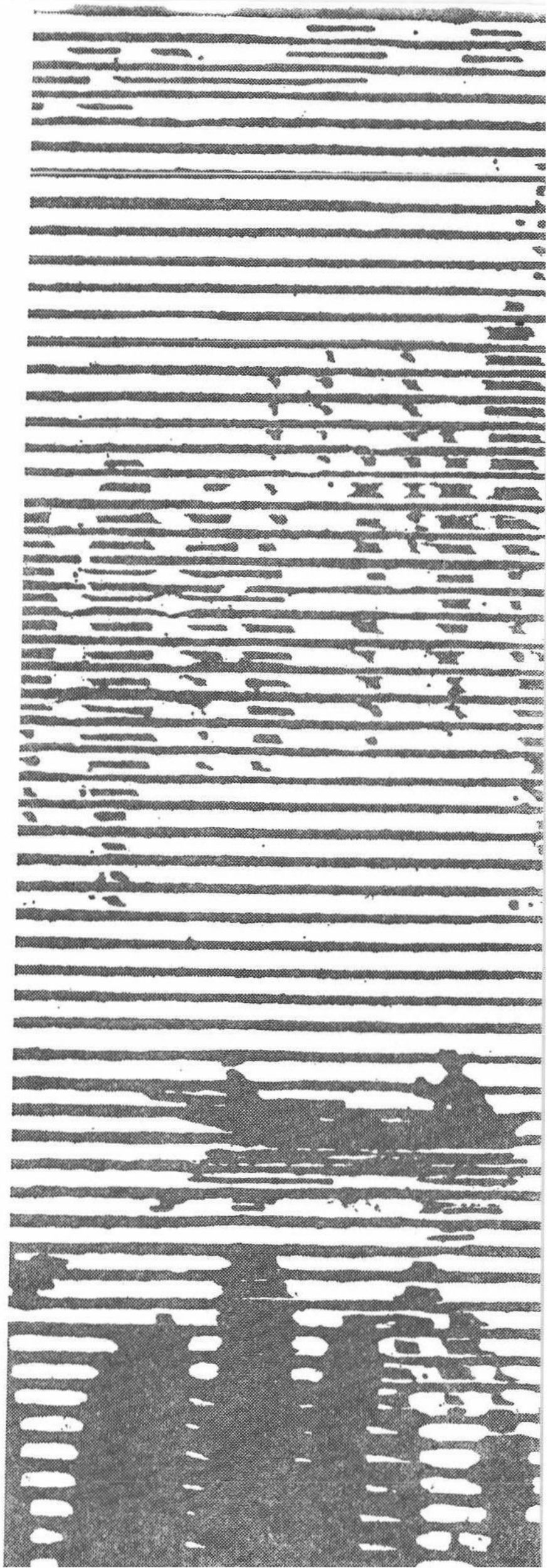
尋　尋　覓　覓　261
錯　錯　錯　264
瞞　瞞　瞞　268
かつて　これ　驚　鴻　影を照し来りき　271
沈園　柳は老いて　綿を吹かず　272
人は　黄昏後を　約せり　274
掌中の明珠　棄擲ること難し　276
哥哥身上に　妹がいます　279
低回　人の子たるを　愧ず　281
深藍の宇宙　283
算うれば　人間の知己　吾と汝のみ　285
此中の甘と苦と　両心のみ知る　289
門があれば　開かなくてもいい　292

原題索引　298

扉カット・莫測版画

I

素樸と頽廃 ——古代



中華世界の代表的な詩集といえば、『詩経』である。むかしは、ただたんに『詩』とのみ称されていた。つまり、詩集といえば、これ以外になかった。

これには周の社会や文化が反映している。周は紀元前十一世紀に商（殷）を滅ぼし、あとをうけたが、それより以前の創業にさかのぼると、前十二世紀からのうたも『詩経』には収録されているとみられる。書物にまとめられたのは、長い期間にわたり、しかもひとりの手になるものではなかった。孔子が、これの整理者のひとりであったのは、たしかである。

周ははじめ、みやこを鎬においた。陝西省西安の西南である。前八世紀にみやこを東の洛邑に移した。河南省洛陽。これより以前を西周、以後を東周と呼ぶ。

東周は五百年あまりつづき、春秋時代と戦国時代に分けるが、『詩経』はその春秋時代にいまのかたちができた。「ひと言でいえば、思邪なし」と孔子が概括したように（『論語』為政）、素樸、明快、楽天的なうたである。古代が野蛮であったとは、簡単にいえない。

ただし、これもこのころまとめられつつあった『易経』（はじめは『易』といった）にも、引用されて残った民謡があり、おそらく『詩経』のたいていの詩よりも、古い時代の社会生活を反映し

ているとおもわれる。それで、『易経』のうたを、いちばん最初においた。

『詩経』に約三百年おくれて、戦国時代の後期に南方で詩集が生まれた。『楚辞』である。新しい詩の形式なので、辞と名づけられたが、長江（揚子江）流域の独特の宗教、音楽の色彩をもつ。『詩経』には代表的詩人としてあげるべき個人がいないが、『楚辞』には屈原があげられる。

周のあと、王朝は秦、漢とつづく。漢代には賦とよばれる、詩とも文章ともつかぬ新しい形式が生まれた。きらびやかな漢字がならぶのが特色である。

また、『楚辞』の形式をひきついだ詩歌のほか、民間では民謡の影響をうけたうたの創作がみられた。漢王朝は楽府という官庁を設立して、民謡を収集することもした。ただし、ほとんど散逸し、いまは伝わらない。

漢は新にかわったが、まもなく再興された。歴史家は区別して前漢、後漢と呼ぶ。漢が衰えて、魏、蜀、呉の三国が争った。

三国鼎立の局面は晋によって統一されたが、北方の異民族の侵入をうけ、晋は江南の地に逃れた。これ以前は西晋、以後は東晋と呼ぶ。ついで宋（劉宋）、斉、梁、陳とかわり、南朝と呼ばれる。呉から数えて六朝ともいう。

江南の風土は南朝の詩に濃厚に反映している。

新しい形式もいくつか試みられ、歌舞と酒宴にあけくれた宮廷生活から、繊細、華麗な詩風が

生まれた。宮体（きゅうたい）という。

北方の北朝でも、魏（北魏）にはじまって、いくつかの国が興亡したが、隋（ずい）が擡頭して、南北対立の局面が終った。五八九年。

この隋にかわるのが唐（とう）であるのは、いうまでもない。

紀元前十二世紀ごろから六世紀まで、詩、うたの流れはおおらかで、素樸なうたいぶりから、繊細で、頽廃的な感覚をうたうように変化したと、おおまかにいえよう。ただし、南朝といえども民間のうたは、健康であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com